

# Free Knowledge Movement

## ウィキサイトの デジタル文化未来論 の世界観を語る

インターネットを使う人なら、誰も一度は「ウィキペディア」を訪れたことがあるのではないだろうか。当初は信憑性の低さや客観性の欠如を疑われた、このオンライン百科事典は、5~6年をかけて質・量ともに大きな成長を遂げ、情報源として信頼を得るに至った。その過程は、インターネット上に人々が集まって共に何かを作り上げるという、Web 2.0に先駆けた世界規模の実験の道のりでもあった。そして今、ウィキペディアの創始者ジミー・ウェールズさんは、次なる野望に向かっている。オンライン図書館「ウィキア」と、オープンソース検索エンジンの開発を進めるウェールズさんに、ウィキサイトの世界観を語ってもらった。

### オンライン図書館ウィキア ウェブにしか存在し得ない情報源を みんなで楽しんで作る

「地球上のあらゆる人が、人間の知識の集合体に自由にアクセスできる世界を創造する」。これは、ウィキペディアが常に目標としてきたことです。現在、250言語で記事が書かれており、全体の約30%が英語となっています。日本語は規模にして、現在5番目です。全記事が一般に向けて、中立を重んじた百科事典スタイルで書かれています。また広告は一切載せず、非営利です。

これに対し2004年に立ち上げたウィキアは、詳細で深い情報を長期間にわたって積み上げていく、マガジンラックや図書館のスタイルです。それほど中立に重きを置かず、広告も載せています。まだ48言語であり、トラフィック自体はウィキペディアほど伸びないかもしれませんが、でも世界には言語もトピックも、百科事典に収まらない情報も山ほどありますから、規模はいずれ遥かに大きくなるはずで

2つのサイトの違いを、「マペット」の項目を例にとりてご説明しましょう。ウィキペディアには、セサミストリート、カーミット、マペット映画など約300の記事があります。一方ウィキアのマペットサイト(※1)は発足後1年3カ月にして、すでに13,150の記事があります。

ウィキアは、そのコミュニティのメンバーが愛してやまない「ニッチインタレスト(隙間のテーマ)のロングテール・コンテンツ」がすべてなのです。例えば毎月100人が書き込むことにより、これまでに書かれた、あるいはこれから書かれるであろうどんな本よりも、詳しい情報が集積されていきます。出版しようとするれば何冊にも及ぶし、採算もとれない。そういうウェブにしか存在し得ない情報源を、コミュニティは楽しんで作っています。

### ステーキナイフと信頼の精神 人は正しいことをすると信じなければ コラボレーションはできない

私がこれまで仕事を通じて学んだ一番大事なことは、「基本的には人を信じる」ということです。人は正しいことをするものだという信頼がなければ、ウィキペディアのような共同モデルは成立しません。

私は以前、ヌーペディアという百科事典サイトを作りました。ところが「人はこういう悪いことをするかもしれない」と想像して、それを防ぐような作り方をしたため、編集過程が長くなり、つまらなく

## ジミー・ウェールズさん

### Jimmy Wales

ウィキメディア財団名誉理事長  
ウィキペディア創始者

大学卒業後、シカゴの先物オプション企業にディーラーとして勤務。2001年、オンライン・コラボレーションツール、ウィキを使った百科事典プロジェクト「ウィキペディア」を創設。2003年に非営利法人「ウィキメディア財団」を設立し、2004年、商用コミュニティサイト「ウィキア」の経営にも乗り出す。また2006年12月、オープンソースの検索エンジンの構想を発表した。ウィキメディア財団では開発途上の教育、福祉機関への安価で良質な情報提供を目標に、プロジェクトを指揮し、世界各地で講演活動を行なう。またハーヴァード大学バークマンセンター客員研究員、クリエイティブ・コモンズ理事など、フリーカルチャーに関係する機関にも名を連ねている。



### ウィキア Wikia

<http://www.wikia.com/wiki/Wikia>  
2004年11月発足。百科事典に収まらない情報をシェアする。政治、サイコロジー、iPod、テレビショー「ロスト」、トラベルガイドなどのページが人気。



### ウィキペディア Wikipedia(日本語ページ)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>  
2001年に英語版が発足。2007年現在、英語版で160万件近く、英語以外の諸言語で450万件以上が執筆されている。全インターネットを対象とするアクセスランキングで20位以内に入っている。



### ウィキメディア財団

<http://wikimediafoundation.org/wiki/>  
知識を世界中の人々に無料で提供することを目標に、ウィキペディア(百科事典)をはじめ、ウィキブックス(教科書)、ウィキクォート(引用集)、ウィキバーシティ(教育共同体)、ウィクショナリー(多機能辞典)、ウィキース(ドキュメント集)、ウィキメディア・コモンズ(メディア素材集)などオープンコンテンツを多言語で作成・開発・配布するプロジェクトを運営している。

※1  
マペット・ウィキ  
Muppet Wiki



[http://muppet.wikia.com/wiki/Muppet\\_Wiki](http://muppet.wikia.com/wiki/Muppet_Wiki)

なった。つまり参加したくなるような、ポジティブなものではなかったのです。後になって、人は良い行動をとるという仮定で作った上で、問題に対処するツールを作ればいいのだとわかりました。

例え話をしましょう。レストランのデザインを任せられたと考えてください。「レストランではステーキを出す。その時お客さんはステーキナイフを使う。それでお互いを刺す恐れがある。だからみんなを檻に入れた方がよい」。まさかそんな風には考えませんよね。私たちは直感的に、そんなことはないとわかっています。さもないと、非常に不愉快で不健全な社会になってしまいます。

でもウェブ社会では、人はいつひどいことをやらすかわからないから、何でもかんでも管理しなければという考えでサイトが作られてきました。代わりにこう考えるだけでよいのです。人はナイフを持たせてもお互いを刺したりはしない。でも例外的にそういうこともあるから、救急車や警察などを用意しておいた方がよい、と。

## ユーザーによるユーザーのためのメディア企業 シンプルなビジョンにわくわくし 自主的に参加できる場となる

ウィキペディアはなぜ成功したのでしょうか。「世界の誰もが自分の言語で自由に使える、オンラインの百科事典」というビジョンを人々が理解し、わくわくするような重要なことだと感じて参加したからです。そういうシンプルなビジョンがなければ、参加者は何をすればいいのかわからないし、コミュニティも目標もありません。

ウィキアがめざすのは、「フリーコンテンツをユーザがコントロールする、世界最大の持続可能なメディア企業」です。オープンソース・ソフトのことをご存知でしょうか。リナックスやアパッチは、フリーライセンスのもとに開発・利用されています。つまり誰でも自由に使い、コピーし、改善してよい。また、改善したものを商業的、非商業的に再分配しても構わない。ウィキアのコンテンツも、同じ原則でやっていきます。誰かが自分のサイトにコピーしたければ、出所を明記して載せればよい。私はある目的に情熱をもった、良識ある人たちが集まれば、よい成果が出せると信じていますから、好きなようにやってもらいます。

ウィキアはシリコンバレーの伝説的な人物たちが関わり、Amazon.comから投資を受ける大掛かりなプロジェクトです。また4つの大陸の6つの時間帯に31人の社員がいて、より多くの言語で簡単に使える環境をめざして、ソフトを開発しています。今のところスターウォーズ、ビデオゲームなどのコミュニティが盛んですが、日本にはオタクやマニアが多いですから、期待していますよ。日本のウィキペディアは世界の勢いについていけないし、ウィキアもまだ軌道に乗っていません。日本でもコミュニティを広げたいですね。

## オープンソースでグーグルに対抗 透明性の高い、参加型の 検索エンジンを開発する

検索はインターネットのインフラの基本的な要素であり、検索エンジンは現代のデジタルライブラリーに欠かせないものです。

私たちは検索によって拾ったり発見したりすることに、ものの見方を頼っています。ところが今のところ、検索情報がどのように分類・格付けされているかは企業秘密で明らかにされていません。私にとって検索というフィルターは政治的問題であり、消費者はその透明性に注意を払うべきだと考えます。

私たちは今の状態を変革して、透明性が高く、参加が可能で、自由に使える検索エンジンを手にするべきだ。そう考えて、昨年12月、オープンソース検索エンジンの開発を発表しました。全アルゴリズムを公開して、テストリサーチもできるようにし、サイトの格付け方法もわかるようにします。

私のねらいは、活発で大きなオープンソースのコミュニティから、多くの参加者を募ることです。オープンソース・ソフトには、「アパッチ」ウェブサーバー(※2)のような成功例がありますが、検索ソフトでもそれが実現できると思うのです。また、アルゴリズムをオープンにするとスパムが入り込む懸念もありますが、ウィキペディアやフリッカー(※3)と同じように、不当行為はコミュニティによって駆逐されるだろうと見ています。

様々な人が参加することにより、よいものが作れる可能性があるというのに、数社の大企業だけが検索分野における技術革新の鍵を握っているのは不健全ですし、やや古くさいやり方にも思えます。これには多くの人が賛同しています。人は大きな目標に興奮するものです。「資金は少ないけど集まって、グーグルやヤフーと同じくらいよいものを作ろう」。そんなプロジェクトに参加するのはすごく楽しいでしょう？

## 未来は教育にかかっている 途上国と先進国が 情報を共有し、対話する世界に

世界のインターネット人口は10億人で、次の5~10年で倍増すると言われています。次の10億人は中国、インド、南米など、従来は世界の対話になかなか入ってこなかった人々であり、これには大きな意味があります。

こうした国では往々にして公平な情報が提供されず、手に入る情報といえば政府や宗教からのプロパガンダ的なものが多い。その市民が「ステーキナイフを使う時も互いを信じる精神」で世界の人々と対話をするようになれば、きっと世の中によい影響をもたらすでしょう。

私は、未来は教育にかかっていると信じています。「ヴィクトリアン・インターネット」という本は、19世紀末に現れた電報はインターネットよりもラジカルな技術革新だったと書いています。そして当時、私と驚くほど似ている発言をしている人がいるのです。「異なる国の普通の人どうしが話をするようになり、友だちになると、戦争がなくなる。なぜなら戦争は指導者が人々を戦場に連れ出すものだから」と。

残念ながら、20世紀はとてつもない戦争が起きてしまいました。でも「電報では不十分だっただけで、基本的な考えは今も有効かもしれない」と考えるのは、私の楽観が過ぎるでしょうか。

途上国の人たちが先進国の私たちと同じような情報アクセスを手にし、平和で実りある生活ができるようになること。それは私にとって、極めて重要なことなのです。

Text by : スマキ ミカ

3月11日に東京で開催された「TOKYO起業家サミット 大挑戦者祭2007」にサプライズゲストとして登場。また、3月23日のICPF(情報通信政策フォーラム)シンポジウムで講演した。

※2  
サーバーソフト市場で大手企業の製品をしのぎ、世界で最も使われている。開発を手がけるアパッチ・ソフトウェア財団は、名実ともに世界で最も成功しているオープンソース・ソフトウェア・コミュニティ。

※3  
画像を投稿・共有できるウェブサイト。アップロードされた画像には、誰でも自由にタグ(キーワード)をつけて分類できる。画像を通してコミュニティを作ったり、他のユーザーと交流することで人気のある、Web2.0の代表的サイトのひとつ。



<http://www.flickr.com/>

## 「ウィキア」が新しい検索サイト「サーチ・ウィキア」を年内に開設

ウェルズさんは、「グーグル」や「ヤフー」など世界大手の検索サービスに対抗できる検索サイトを年内に開設することを公言している。検索サイトに掲載する広告の収入を、非営利事業のウィキペディアの運営に活用し、情報量の拡大に対応した設備投資などに充てるとのことだ。



サーチ・ウィキア  
[http://search.wikia.com/wiki/Search\\_Wikia](http://search.wikia.com/wiki/Search_Wikia)